



渋谷区役所
生活福祉課

山本凌我さん

↑ 渋谷区役所の前にて

大学の講座で学び、公務員に。
「誰もが生きやすい社会を作る」という
目標に向かって。

大学時代は仲間と切磋琢磨しながら、エクステンションセンターの公務員試験講座で勉強に打ち込んだ。そして現在は、渋谷区の職員として働いている。「区民に信頼をおかれ、誰もが生きやすい社会を作る」。その思いを胸に、歩みを進める。

病気、怪我、障害など、様々な困難に直面して生活に困る人がいる。そうした人に寄り添い、生活を守り、やがて自立へとつなげていく。山本凌我さんは、東京都の渋谷区役所生活福祉課でケースワーカーとして働いている。

担当する生活保護の受給者は80～100人。必要に応じて自宅訪問などを行いながら、顔を見て、話を聞き、生活の様子を確認する。ときには病院に付き添い、関係機関とも連携を取りながら、よりよい

支援へとつなげていく。

「人との関係を一から築き上げていくので、難しさを感じることもあります。でも支援によって生活が安定したり、仕事に就いて自立していく様子を見られることにやりがいを感じます」

生活保護は最後のセーフティネット。そこに行きつくまでにも様々な支援制度がある。その人にとっての適切な支援を差し伸べるために、各種制度について勉強の毎日だという。

やまもと りょうが

1998年静岡県磐田市生まれ。2016年静岡県立浜松西高校卒業、2020年専修大学経済学部卒業後、渋谷区役所勤務。趣味はマラソン。



↑大学3年次、関東学生トライアスロン選手権に出場



↑大学卒業時、学部の友人たちと（後列左）



↑大学にて学部の友人と
←ユニカル・ラボラトリーの仲間と（前列中央）

公務員試験講座と トライアスロンと学外活動

静岡県磐田市出身。専修大学に入学したとき、「漠然と公務員になりたいと思っていた」。エクステンションセンターの公務員試験講座を受講した。

1年次、講座は2週に1回と緩やかなものだった。それでも受講するうちに見える社会が変わってきた。

「生活の中のいたるところに行政サービスがかかっている、それにより毎日の当たり前の暮らしが成り立っている。そうしたことを意識するようになり、市民生活を支える役割を担いたいという思いが高まりました」

2年次から講座の時間は増えたが、同じ目標を持つ仲間が学内にいることが心強かった。

「仲間と競い合うことで、高いモチベーションを保つことができました」

学生時代、公務員試験講座の勉強と並行して打ち込んだことがある。その一つがトライアスロンだ。高校まで競泳をしてきて、長距離走にも自信があった。専大にトライアスロンサークルがあることを知り、入部を決めた。

しかし、メンバーは一人きり。顧問の富川理充商学部教授の指導の下、トレーニングを行い、大会に参加した。競技を通して貴重な経験を得た。

富川先生がかかわりを持つパラトライアスロン選手と一緒に練習する機会があった。障がいのある人との交流を通し、「自分の感じている当たり前が、

全ての人にとっての当たり前ではない」と感じた。

そしてもう一つ、学生時代に力を入れたのが、中高生に対するキャリア教育を行う学生団体ユニカル・ラボラトリーでの活動だ。学校に出向いてワークショップを開催し、中高生が自らの将来について考える機会を提供した。

「職業選択するうえで、自分が一番大事にしているのは何だろう」

その問いかけは、自分自身に対する問いかけにもなった。答えは、「誰もが生きやすい社会を作ること」。活動を通し、自らの将来像も明確になっていった。

きめ細かなサービスを

複数の内定を得た中から、渋谷区役所で働くことを選んだ。繁華街やビジネス街、住宅街など、地域ごとに多様な特色を持つ渋谷区。そこで人々の生活を支えたいと思った。

入職して4度目の春を迎えた。学生時代に様々な経験を通して思い描いた「誰もが生きやすい社会を作る」という目標は今も変わらない。その実現に向けて、小さなことかもしれないが、心掛けていることがある。

「どんな方に対しても丁寧に接するようにしています。そして、多様化する社会福祉のニーズに対応するためにも、区民の声に耳を傾け、知識を広げたいです。そうすることで、よりきめ細かなサービスを提供できていると思っています」